

## 親子で楽しむ「ブルーノ・ムナーリ展」

(公財) かながわ国際交流財団 野呂田純一

主として湘南・三浦半島の公立美術館4館等をメンバーとする、プラットフォーム型アートプロジェクトであるマルバ MULPA (Museum UnLearning Program for All/ みんなで“まなびほぐす”美術館～社会を包む教育普及事業～) では、神奈川県内に住む多様な背景を持つ方々の美術館へのアクセシビリティの向上とともに、その方々と美術館とのつながりを生む教育普及事業を進めている。  
マルバの教育普及事業の一環として、本年度より、神奈川県立近代美術館とかながわ国際交流財団(以下、「財団」)では、国際交流・多文化共生を目的とするインクルーシブなワークショップを協働して行うこととしており、今回のワークショップはその第1弾となる。



展示室内でのギャラリートーク

神奈川県立近代美術館・葉山館では企画展として、本年4月7日から6月10日まで世界的に著名なイタリアの作家・デザイナーである、ブルーノ・ムナーリ(Bruno Munari)の回顧展「ブルーノ・ムナーリ こどもの心を持ちつづけるということ」(以下、「ブルーノ・ムナーリ展」)を開催したが、同館の水沢勉館長によれば、ムナーリが自分の子どものために作ったそれらの作品は「国籍や文化を問わず」、世界中の子どもたちに受け入れられてきた。

県内には約160年前の横浜開港からの歴史もあって、横浜市内に設立された外国人学校は比較的多く、現在11校ある(※県HPに各種学校として掲載された学校数)。昨年7月に開催したマルバ・キックオフイベントでは、その外国人学

校の内、3校から美術科の先生3名の参加を得たが、今回のワークショップではその先生方のうち2名を引率教員として、教え子やその保護者を「ブルーノ・ムナーリ展」に招待した。

今回の企画の着想は、筆者が以前、小学生の子どもを持つ、ある外国人ママから、子どもの年齢が上がると、ママより日本語をうまく話せるようになるため、親子間のコミュニケーションギャップが生まれやすいと聞いたことにある。子どもとその保護者が一緒にアート作品を鑑賞することで、親子間のコミュニケーションを増やせないかと思い、同館杉山昌夫普及課長と相談したところ、「会話を楽しむ日」(同館が展示室内で来場者同士の会話をできる日としている)である6月3日(日)にワークショップを開

催することとなった。

当日は横浜山手中華学校と神奈川朝鮮中高級学校の2校から初級部(小学生)、中級部(中学生)、高級部(高校生)の子どもたちとその保護者、引率教員(王節子先生、姜泰成先生)合計19名が参加したが、外国人学校の子どもの絵画作品を展示する企画展を、横浜市内の図書館等で開催している「外国人学校の子どもの絵画展実行委員会」のスタッフの方々3名(加藤佳代さん、藤原敏雄さん、平澤咲さん)が、両校を結ぶボランティアとして参加した。

水沢館長による、子どもたちを迎えたウエルカムスピーチの後、両校の子どもたち同士が交流を深められるよう、自己紹介を含むアイスブレイクとグループご



「ポータブル・アート・ミュージアム」の説明をする鈴木さん・八木さん



「美術館」づくりに熱中

との昼食会を実施した。普段、同じ地域に住みながらも、つながりがない両校の児童・生徒であったが、参加した子どもたちがそれぞれの学校で美術部やアトリエに所属していることもあって、互いにどんな作品が好きか、あるいは、普段、どんな作品を作っているか等を話題にして盛り上がった。

打ち解けた雰囲気の中、参加者たちはムナーリ展担当学芸員の高嶋雄一郎さんによるギャラリートーク(解説)を聞きながら、展示作品を鑑賞した。高嶋さんはムナーリが気に入っていた図形として「○」「△」「□(正方形)」があり、それらは展示された作品の中にもあると言う。その図形を先ほど昼食を一緒に食べたグループごとに探し出すアクティビティが行われたが、アートは好きでも、普段は来ることのない「美術館」という施設の中で子どもたちは目をキラキラさせながら、展示室内の作品から図形を探し回った。

続けて、教育普及担当の学芸員鈴木敬子さん・八木めぐみさんがファシリテーターとなって、同館で開発された創作キット「ポータブル・アート・ミュージアム Portable Art Museum」を使ったワークショップが行われた。



ひとりひとりの「美術館」への思いにみんなで耳を澄ます

国内の数多くの美術館から同館に送られてくる、様々な企画展の広報チラシを使って、小さく、持ち運び可能な「美術館」を作るこのキットは、会期が終わったチラシを再利用しながら、美しい図版で自分だけの「美術館」を作る喜びを味わい、最後は来館の「お土産」として持って帰ることもできる、まさに一石三鳥のようなキットである。



ギャラリートークの前に鑑賞ルールの説明をする高嶋さん

や文化的な背景の異なる人同士がこんなにもアートによってつながれるのかという、さわやかな感動を覚えた。学芸員の鈴木さんが、参加者の「美術館」の発表それぞれに対して、「いいね!」(よいと思われる点)を他の参加者が言葉として贈ることを思い付いたことがそうした熱気や感動につながったと思われる。

マルバではこの2年近い活動から「美術館」という文化施設が、障がいのある方々や定住外国人と継続的につながっていくには、美術館側の「ウエルカムな姿勢」が大切であることを学んだ。そうした「ウエルカムな姿勢」が土台になることで、子どもたちが安心して、インクルーシブなワークショップに参加できることを改めて感じるワークショップとなった。

※神奈川県HP  
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f544/p757277.html>

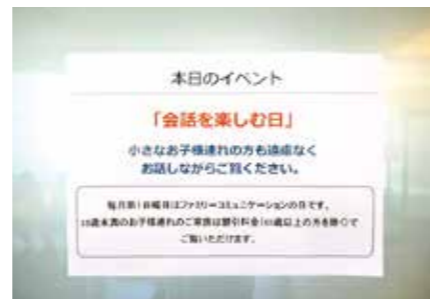
参加者は自分だけの「美術館」を作り上げた後、最後は集まって、一人ひとりがその「美術館」への思いを語ったが、自らが熱心になった分だけ、他の参加者の思いに耳を澄ますことができるのだろう。互いに他者の思いをできるだけ聞き取ろうという熱気が自然と生まれ、年齢



中庭ではこけし(イサム・ノグチ作)がお出迎え



回顧展の会場入口



当日は「会話を楽しむ日」